

機関番号：64401

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20720247

研究課題名 (和文)

呪術とジェンダーに関する歴史人類学的研究：ビルマにおける霊媒カルトの事例から

研究課題名 (英文)

An Historical Anthropological Study of Magic and Gender: A Case Study of the Spirit Medium Cult in Myanmar

研究代表者

飯國 有佳子 (IIKUNI, Yukako)

国立民族学博物館・外来研究員

研究者番号：90462209

研究成果の概要 (和文)：

ミャンマーでは近年、霊媒の主たる担い手が女性から「メインマシャー」(Male to Female トランスジェンダー)へと変化している。そこで後者の霊媒に注目したところ、守護霊との間でとり結ぶ関係性や儀礼に対する解釈、招命の証拠としての夢の語りに変化が見られることが、新たに分かった。こうした変化は、資本主義化やグローバル化といった急激なモダニティの経験が、ビルマの宗教とジェンダーをめぐる秩序に再編を迫っていることの一例と考えられる。

研究成果の概要 (英文)：

In Myanmar, the majority of mediums have changed to *Meinmashas* (Male to Female transgender) from women for these twenty years. Focusing on latter mediums, it has newly revealed that the relationship between their tutelary spirits, interpretation of the rituals and narrations of their dreams which is regarded as the proof of calling from spirits have changed among them. These changes can be regarded as one example that the sudden experiences of modernity such as capitalism or globalization have forced the system of religion and gender in Burma to be reorganized.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：ジェンダー、ビルマ (ミャンマー)、モダニティ、呪術、歴史人類学、霊媒カルト

1. 研究開始当初の背景

2002年から2003年に実施した上ビ

ルマ農村における調査研究から、当該地域において支配的宗教である仏教と、精霊信仰を中心とする呪術が対比的に捉えられていること、そしてこの対比が男／女の宗教実践の文脈で語られるといった二項対立的な秩序が存在することが分かった。その一方で、グローバル化に伴う換金作物の劇的な価格変動を背景に、こうした秩序には変容の兆しも見られた。というのも、通常世帯で行われている祭祀にはかかわろうとしない男性が、都市に住む職業的霊媒を招き、宝くじの当選を祈るといった様子が見られたからだ。

このように、都市部を中心に展開する霊媒カルトが村落部に浸透し始めていることを受け、2007年から始めた都市部の霊媒カルトの予備調査から、いくつかの興味深い事実が浮かび上がってきた。まず、90年代に始まった経済政策の自由化と都市部における霊媒カルトを含む呪術的实践の流行が軌を一にしたものであるという点、そして従来霊媒カルトの中心となる霊媒には女性が多いといわれてきたにもかかわらず、近年では「メインマシャー」と呼ばれる Male to Female のトランスジェンダーあるいはトランスヴェスタイトの人々がその中心的役割を担っているという点である。

2. 研究の目的

そこで、本研究ではビルマ（ミャンマー）を事例に、非西洋社会におけるモダニティの受容と展開を呪術とジェンダーを通して解明することを目的とする。というのも、世界には近代化とグローバル化を同時並行的に経験する

国や地域は少なくないが、旧社会主義国であったミャンマーは政治体制の変動を含め、90年代以降急激な変容を余儀なくされている。そのため、段階的に近代化、グローバル化を経験してきた国や地域とは異なる反応が見られると考えられる。より具体的には、ミャンマーの人々が呪術を用いて近代化とグローバル化に対峙する様子を明らかにするとともに、呪術的实践におけるジェンダー規範の変容とそれが人々の生活に与える影響について考察することをおして、資本主義やグローバリズムに象徴される急激なモダニティの経験が、ビルマの宗教とジェンダーをめぐる秩序をいかに変化させているのかを解明する。

3. 研究の方法

本研究では共時的課題と通時的課題の2つを設定し、双方向的なアプローチにより研究目的の達成を目指す。

①共時的課題： 現在ミャンマーでは様々な呪術的实践が行われているが、本研究では霊媒カルトに焦点を絞る。第1の理由は、霊媒カルトは資本主義やモダニティのまっただなかでその活動を展開している点にある。霊媒カルトにおける職業的霊媒と顧客の間に見られるやり取りの中には、資本主義的状况下における人々の生活や欲望が色濃く反映されている。霊媒は託宣や病氣治療等の呪術的实践にかかわる知識を象徴資本としながら、それらのサービスを提供する専門家として活動している。第2に職業的霊媒の成巫過程や儀礼では、ローカルな精霊をめぐる象徴システムの中にグローバルな表象世界が縦横無尽に登場する場面が見

られる。たとえば、ムスリムや山地民の霊が強大な力を持つ精霊として崇められたり、中国からやってきた商人が新たに精霊として祀られたりというように、精霊をめぐる表象の産出には留まる場所がない。また多くの場合、職業的霊媒は心理的・身体的・経済的苦痛の経験を有し、師の指導を仰ぐ中で状況の緩和と霊媒としての新たな生を獲得する。これは、急激なモダニティのなかで生きにくさを感じた人々が、特定の霊媒を守護霊とすることで霊媒としての新たなアイデンティティを獲得していく過程と捉えられる。但し、精霊と人間との関係性は精霊の個性と異性愛を基盤として師匠により決定されるため、かつてはトランスジェンダーは霊媒になれないとされるなど、当人と精霊のジェンダーが重要な意味を持つ。ここから、まず人間と精霊の関係性とそれらの変化の有無についての解明を試みる。

②通時的課題： ビルマの宗教とジェンダーをめぐる秩序の変化を文献資料から追うことで、村落部で見られた仏教／精霊信仰、男性／女性という二項対立がいかんにして形成され、変容してきたのかを歴史的に検証する。そのために、精霊信仰の歴史に関する先行研究（人類学、歴史学）や植民地官吏の残した文献の他に、貝葉やパラバイと呼ばれる折本、碑文などの一次資料の読み込みを行う。

4. 研究成果

<研究の主な成果>

ここ 20 年の間に霊媒の主たる担い手が女性から「メインマシャー」(Male to Female) のトランスジェンダーあるいは

トランスヴェスタイト) へと変化していることは、既にフランスの研究者が報告している。ところが、メインマシャー霊媒が増加した理由についての分析は、国内外を問わず殆ど行われていない。そこで本研究では、メインマシャーを含む霊媒に注目して現地調査を行った結果、以下の 5 点が明らかになった。

(1) 宗教とジェンダーを巡る既存の研究の整理と理論的考察

これまで精霊を奉じる霊媒を中心に形成される霊媒カルトは主に女性の関わるものとされてきた。その理由はビルマ上座仏教社会において、仏教と精霊信仰が二項対立的に扱われ、しかも各々の実践はジェンダーと密接に結び付けられてきたことに起因する。そこで、『現代ビルマにおける宗教的实践とジェンダー』において、従来の議論の理論的整備を行うと同時に、2008 年の日本文化人類学会においても都市部霊媒カルトとの比較対象として村落部における女性の精霊信仰への関与のあり方を報告した。また女性と仏教のかかわりについては、『ミャンマーの女性修行者ティーラシン—出家と在家のはざまを生きる人々』及び「フェミニズムと宗教の陥穽：上ビルマ村落における女性の宗教的实践の事例から」で論じている。これらから、本研究の前提となるビルマにおける宗教とジェンダーのかかわりについて明らかにした。

(2) トランスジェンダー霊媒を排除する規制の存在

聞き取り調査から、かつては「本物の」男あるいは女しか霊媒になれないとする規制が存在し、厳格に守られて

いたことが明らかとなった。その結果、性的マイノリティの人々はたとえ霊媒になりたくとも、メインマシャーであることを理由に霊媒となることができなかつたと考えられる。これについてフランスの Brac de la Perriere は、祭礼では自らの顧客の望みをよりよく精霊に届けるため、霊媒同士のあいだで最も重要な儀礼シーケンスである踊りを巡って競合が起こり、その結果踊りの巧い若いトランスジェンダーが霊媒として台頭してきたと議論しているが、なぜ彼らの台頭が許容されるのかといった点や、他の要因についての分析は行われていない。

(3) 霊媒にならない女性

そこで、筆者はこれまで霊媒の中心的担い手であった女性と精霊との関係性が、いかに変化しているのかを調査することで、なぜ霊媒となる女性が少なくなっているのかについての考察を行った。霊媒に限定せず、広い意味で精霊を信仰する女性へのインタビューの結果、招命を受けたにもかかわらず職業的霊媒を選択しないケースや、その逆のケースが見られることがわかった。ここから、霊媒という職業選択にはむしろ経済的要因が大きな影響を与えており、招命経験と霊媒を職業とすることの間には、必ずしも直接的な因果関係が認められないといえる。農村部とは異なり、高等教育を受け、大衆在家瞑想運動など仏教的実践に積極的価値を見出す都市部の女性にとって、霊媒は必ずしも魅力的な職業ではない。その結果、たとえ精霊の招命を受けたとしても、仏教的対処法を試みることで霊媒となることを回避するなど多様

な関わり方がみられる。こうした点が、女性の霊媒の成り手が減少した理由と考えられる。本分析は、2010年の「宗教と社会」学会において報告した。

(4) トランスジェンダーにとっての霊媒という職業

一方、トランスジェンダーの場合には、逆に霊媒になるメリットが存在する。ビルマ人仏教徒社会における規範的宗教は上座仏教であり、精霊の存在は経典において保証されながらも、精霊に対する信仰は「正統」な仏教の周縁に位置づけられ、異端視される。こうした見方は上仏教徒である霊媒も共有している。しかし、仏教と精霊信仰という対立項は、ときに男性／女性という対立項と並列的に捉えられることから、彼らにとって精霊信仰は精霊を介し「女性的領域」に接近することを意味する。実際、各地で行われる大規模な祭礼では、男の精霊や女の精霊などさまざまな精霊が慰撫の対象となるが、精霊を憑依させる依代となる霊媒は、神話に則しその度ごとに男や女の異なる衣装を身にまとう。こうした実践は多くが女性としてのアイデンティティを持つメインマシャーにとって、身体性の性に合致した男としての生活を求める社会規範から自由になり、女性として美を追求したいという欲求を充足させるものとなる。しかも、彼らにとって霊媒になることは、単に彼らの内面や趣味趣向に合致する以上の意味を持つ。規範の有名無実化した現在、霊媒になることは精霊の超自然的力への畏怖を背景に、性的マイノリティとして疎外されてきた自らの社会的地位を向上させることを可能とする上、託

宣が評判になり有力な相談者を顧客に持てば、多額の報酬を得て、裕福な生活を送ることも夢ではない。ここからメインマシヤーにとって霊媒となることは、仏教の下位にかかわる霊媒としてスティグマ化されるというマイナスの意味合いより、むしろ性的マイノリティとしての生と性を積極的に再構築することを意味しているといえる。本分析の成果は、「性的マイノリティとしての生／性の再構築：現代ミャンマー精霊信仰における霊媒の変容」及び2008年東南アジア学会において報告した。

(5) トランスジェンダー霊媒の増加に伴う精霊信仰の変容

また、トランスジェンダーを中心とする霊媒からの聞き取りは、別の興味深い変化も示唆していた。霊媒は「精霊に愛される」という何らかの苦悩を伴う招命経験をもち、苦痛緩和のために霊媒になるとされる。そして精霊はしばしば自らの愛を夢において示し、霊媒になれば夢の中で精霊との性的な接触を持つとされる。ところが、トランスジェンダー霊媒の間では、精霊からの招命の証としての精霊との性的な夢の語りが極端に少ない、あるいは否定する傾向がみられた。このほかに、成巫儀礼を精霊との「結婚」と捉える従来の解釈を否定し、別の儀礼解釈を行う様子や、男性への恨みから出会った男性全てが不幸になるよう呪いをかけ、自らの夫として霊媒になるよう仕向けるといった女性の精霊の神話が、呪いの結果彼女に愛された男性はメインマシヤーになるという方向へ変化していることがわかった。こうした変化は、

その多くが同性愛者であるトランスジェンダー霊媒が、精霊の主体性や神話における異性愛主義、ならびに自らのセクシュアリティを否定することなく、ビルマの精霊信仰における異性愛主義を脱構築するための交渉的過程と考えられることを示した。本研究の成果は2010 International Burma Studies Conference 及び2010年日本文化人類学会において発表した。

<成果の国内外におけるインパクト>

上記(2)で示したとおり、トランスジェンダー霊媒の台頭に関する議論は、これまで霊媒同士の競合という観点からのみ捉えられ、それ以外の社会的、経済的要因については議論されてこなかった。これに対し、本研究ではより広い文脈からこの問題に迫り、その結果、彼らの台頭は精霊信仰のあり方とジェンダーという文化的システムそのものを変える可能性を有することを示した。こうした変化は、資本主義化やグローバル化といった急激なモダニティの経験が、ビルマの宗教とジェンダーをめぐる秩序に再編を迫っていることを例証するものといえる。

実際、ビルマの精霊信仰に関する研究が現在最も進んでいるフランスにおいて発表したところ、本研究の成果に大きな注目が集まり、英文での成果発表を急ぐよう依頼を受けた(英文での成果発表は今秋頃の予定)。ここから本研究は国内はもとより国外でも大きなインパクトを持つものといえる。

<今後の展望>

今回の研究では予定より通時的研究が進展せず、共時的研究が主体であった。自らも複数の史料の読み込みを行

ったが、通時的研究の進展には歴史家の協力が不可欠であることを痛感した。植民地経験を含め宗教とジェンダーのかかわりに関する歴史学の成果も踏まえ、今後は歴史研究者との共同研究を進める必要がある。また、調査の過程において精霊という表象をめぐる当該地域の民族間関係について分析する必要があることも分かった。これはビルマだけでなく広く東南アジア全体との関連で考察すべき問題でもあるため、他地域の研究者を含む共同研究を視野に入れつつ、より細かい調査をしていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 飯國有佳子、「性的マイノリティとしての生/性の再構築：現代ミャンマー精霊信仰における霊媒の変容」月刊『ヒューマンライツ』(編) 部落解放・人権研究所第271号、査読無、2010、50-56頁
- ② 飯國有佳子、「フェミニズムと宗教の陥穽：上ビルマ村落における女性の宗教的実践の事例から」、『国立民族学博物館研究報告』、査読有、2009、34(1)、pp. 87-129

[学会発表] (計6件)

- ① IIKUNI, Yukako, Avoiding “Marriage” to Nats: A Transition in the Interpretation of Dreams and Sexuality among Transsexual Mediums in Myanmar、2010 International Burma Studies Conference、2010年7月8日、Universite de Provence, Marseille, France
- ② 飯國有佳子、「精霊と結婚しない「男」：ビルマ精霊信仰における夢とセクシュアリティの変容」、日本文化人類学会第44回研究大会、2010年6月16日、立教大学観光学部
- ③ 飯國有佳子、「女性からトランスジェンダーへ：女性から見たミャンマー都市部霊媒カルトにおける霊媒のマジョリティの変容」、「宗教と社会」学会第18回大会、2010年6月5日、立命館大学
- ④ 飯國有佳子、「アフルー：上ビルマの通過儀礼と社会秩序」、日本文化人類学会第43回研究大会、平成2009年5月30日、

大阪国際交流センター

- ⑤ 飯國有佳子、「ビルマにおけるトランスジェンダー霊媒の増加に関する一考察」、東南アジア学会第79回研究大会、2008年6月7日、大阪大学
- ⑥ 飯國有佳子、「ジェンダー表象の多様性と儀礼：上ビルマ村落における祖霊祭祀の事例から」、日本文化人類学会第42回研究大会、2008年5月31日、京都大学

[図書] (計2件)

- ① 飯國有佳子、風響社、『現代ビルマにおける宗教的实践とジェンダー』、2011、316頁
- ② 飯國有佳子、風響社、『ミャンマーの女性修行者ティーラシナー出家と在家のはざまを生きる人々』、2010、62頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/20720247.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯國 有佳子 (IIKUNI YUKAKO)

国立民族学博物館・外来研究員

研究者番号：90462209

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし
研究者番号：